

カズヤ

市川 恵美子

あいつは、かわっていた。

「ケント、ちよっと、ちよっと」

朝、教室にはいるなり、ユウキが手招きした。

「女の子の転校生がくるよ」

ユウキは、得意そうにわらった。

「えっ」

「今、みたんだ。職員室の前で、髪の毛長い女の子とおかあさんらしい人が、バスケット話していたから」

バスケットというのは、おれたち四年一組の担任の原先生のことだ。高校の時にバスケットボールでインターハイに出たというのが、自慢の先生だ。だから、みんなは原先生をバスケットと呼ぶようになった。先生本人もこの呼び方は、けっこう気に入っているようだ。

「で、女の子って、かわいかった？」

うちのクラスの中に、かわいい子はいないと

おれは思っている。そんなことを女の子たちにしられたら、たいへんだけど。

チャイムが鳴り、バスケが教室にはいつてきた。後ろから、髪の毛の長い女の子が続く。結構、背が高い。

みんながさわぎだす。

「静かに。きょうから四年一組に入る坂本さんだ。自己紹介してもらおうかな」

転校生は、小さくうなずき頭を下げた。長い髪が床につきそうになる。

「坂本和也です。よろしくお願いします」
教室の中がざわめく。

「カズヤって」

「うん、たしかに」

ゆっくり頭をあげた。女の子じゃないのか。

「オレ、ヘアドネーションやっているので、髪の毛、長いです。そろそろ、二年になります」

バスケは、坂本くんの肩に手をおいた。

「えーと。ヘアドネーションというのは、病

気や体質で髪の毛が少ない子供たちのために自分の髪をのばし、寄付するという活動のこ
とだ。その髪の毛を集めてウィッグを作るそ
うだ。ようは、かつらのことだ。それでいい
かな」

「はい」

坂本くんは、髪をかきあげた。

「じつは、先生もそれ以上、詳しくなくて、
わるい……。あとは、坂本のほうがわかる
と思うから、興味のある人は、聞くように」
みんなは思い思いにしゃべりはじめた。

「坂本くんって、いわれなければ、女の子に
みえるね」

「スカートはいたら、わからないー」

うしろ姿は、クラス一番のかわいさだな、き
つと。

おれは、うしろの席のユウキをにらんだ。

「どこが、女の子だよ」

ユウキはおれに顔ちかづけて、

「男には、みえねーだろ」

といいかえしてきた。まあ、ユウキがまちがえたのも無理ないか。

「しずかに。授業はじめるぞ。えー、ケントの横の席空いるから、坂本さんは窓際のあの席に座るように」

バスケットは、そういつて、おれの横の席を指さした。坂本くんは、下をむいたまま席についた。

「わからないことは、ケントに聞くように」バスケットがにっこり笑う。

興味しんしんの女の子たちは、休み時間を待って、坂本くんのまわりによつてきた。

「髪、すぐくつやがあつてきれい。どんなシャンプー使っているの」

「長くて、枝毛にならないの」女の子たちの質問に、坂本くんはいやな顔もせず、いや、逆にうれしそうに、ひとつひとついいねいに答えていく。

「なにを使うかよりも、シャンプーしたあとのほうが大切だね。洗ったら、すぐドライヤ

ーで乾かすこと。自然乾燥が一番髪によくないよ」

坂本くんのことばに、

「そうなんだ」

女の子たちは、真剣に聞いている。

「のばしたいけど。でも無理かも」

女の子たちは、つぎつぎと質問をしていく。

「なんだ。なんだ。ここはエステサロンかよ」

ユウキが、女の子たちにいったとたん、リーダー格のハルナが、ユウキをにらんだ。

「ユウキだって、おじさんになったら、髪うすくなるかもよ。今から坂本くんに聞いとけば」

「う、うるせー。おれがおじさんなら、自分たちだって、おばさんだろー。なあ、ケント」

ユウキは、困ったことがあると、おれに助けをもとめてくる。

「そうだな」

ほんとうに心配しているのかもしれない。前に、ユウキのパパが、髪の毛を気にしているって聞いたことがあったから。

坂本くんは、なぜ、ヘアなんとかをしたいと思ったのかな。二年もがんばる理由はなんだろう。

開けていた教室の窓から、風がはいつてきた。坂本くんの髪が、ふわりとなびく。ほんのりと花のかおりした。坂本くんのシャンプーのおいかな。

三時間目の体育は、となりのクラスと合同授業だった。

「きょうは、最後にミニゲームをするぞ」
二組の先生がいう。

二組の藤川たちが、にやにや笑ってこつちをみている。

「ケント、みたか」

ユウキが、つぶやいた。

「ああ」

藤川は、背が高く、体も大きい。スポーツ万能で、体当たりされたら、はねとばされてしまふ。どうみても同級生にはみえない。前にサッカーのミニゲームをしたときも、みていないうしろの方で、体操服をひっぱりじやまをしたり、わざとぶつかってきたりした。藤川の仲間もまわりを囲み、見えなくするのだ。いつも、同じ手で負けるわけにはいかない。といつても、正面からむかって勝てる相手ではない。みんなに目で合図する。

「気をつけろ」

「うん」

ボールは、ユウキに集めることにした。地元
のサッカーチームにはいつているユウキは、
そのチームのレギュラーだ。藤川は、すぐユ
ウキをマークする。しつこいくらいに、はり
ついている。右にも、左にもいけそうにない。

「うしろ」

坂本くんが叫んだ。いつの間にかユウキのす
ぐうしろにいた。

「たのむ」

ぎりぎりのパスがとおった。坂本くんは、そのままだリブルしてゴールにむかっていく。髪が風になびいて、プロのサッカー選手みたいだ。

はやっ。

だれも、そのスピードについていけない。

ゴール。

「坂本くん、すごーい」

「やったー」

女の子たちがキャーキャーさわいでいる。

うーん。たしかにかっこいい。

それでも坂本くんは、なにもなかったような顔をしている。

それが自然に絵になっている。

藤川たちが、盛り上がっているおれたちをにらんでいる。このまま、藤川は引き下がるのかな。

ある日、その心配があたってしまった。

休み時間をはさんで、音楽室に移動する途中だった。トイレの前をとおると、藤川の声が聞こえてきた。

「おまえ、坂本っていうのか。なんだ、なんだ。その髪、女みたいだな」

「ほんと。かっこつけてんじゃねーよ」

「今どき、はやんねーし」

藤川の仲間たちの声もした。

「おい、無視か」

坂本くんは、藤川たちとは話をせず、廊下にでようとしたようだ。

「ヘアなんとかって、しらねーけど」

と、藤川が髪の毛をうしろからひっぱった。

「さわるなよ」

坂本くんは、うしろをふりむき、藤川を突き飛ばした。女の子たちの質問に答えていた物静かな坂本くんの声とはちがっていた。

「かっこつけんなよー」

藤川が、胸ぐらをつかんだ。それを合図に、仲間たちが坂本くんを囲んだ。つきとばし、

けとばす。坂本くんひとりで、何人も相手にするのは無理だ。それでも、坂本くんは

「なぐりたいなら、やればいい。ほら」

と藤川にあたっていく。

「おもしれー」

いうのと同時にパンチが坂本くんの顔面にあたる。足をかけ、けとばす。倒れても、倒れても坂本くんは、フラフラと立ち上がる。

「それで、おわりか」

また、藤川の前に立つ。

「フン」

やられても、坂本くんは立ち上がる。

なにかしないといけない。助けないといけない。でも、足が、手が動かない。うしろからきたユウキも、びっくりした顔のまま、固まっ

っている。映画の場面のように、はりついたままだ。

「もつとやれよ」

の声に、さすがの藤川も、気持ちが変わるくなっ

「おまえ、頭おかしいよ」
はきすてるようにいい、去っていった。
女の子たちが、坂本くんに声をかける。

「どうしたの」
髪をかきあげた坂本くんは、ふっと笑った。

「ちよつと、すべっただけ」
目があう。自然に下をむいてしまう。坂本くんはなにもいわずに、音楽室に歩いていく。服の汚れも気にせず、足をひきずりながら。ユウキと顔を見あわせた。冗談もゲームの話もしない。

「どうしたの。しんみりしちゃって。わかった。きょうのリコーダーのテストを心配しているの」

音楽の小林先生が音楽室の前にいた。落ち込んでいるところに、さらに落ち込んだ。
あの日以来、坂本くんとは目をあわせることができない。

「なあ。自分で自分がいやになることってない？」

ユウキは、帰りの道で足元の小石をけとばした。小石は、カツンとかわいた音をたて、電信柱にぶつかった。その小石を、パスされたサッカーボールのように、今度はおれがけとばした。

すぐ、坂本くんのことだとわかった。

「いつもは、えらそうなことを言ってるくせに、なさけないよな」

「ユウキだけじゃないよ」

坂本くんは、ひとりで藤川に向かっていた。

誰がみても藤川がわるい。やりかえすこともできたはずなのに、それもしない。なぜ、どうして、自分をいじめるのか。

「あんなやつ、はじめてみた」

「おれも」

坂本くんはときどき、教室の窓から外をみている。真っ青な空だったり、今にも雨がふりだしそうな灰色の空だったり、それをただ、ぼっーとみている。

担任のバスケが出張でいなかった時があった。かわりに教頭先生がやってきた。課題にだされていた作文を書くことになった。みんな、わたされた原稿用紙にむかう。はじめのうち、となり同士で話しあったりしていたが、しばらくすると、みんなは机に向かいはじめた。教頭先生は、みんなのまわりをみてまわっていた。

教頭先生が、坂本くんの近くにやってきた。

「髪の毛がじやまにならないのかな」

坂本くんに話かける。

髪をかきあげた坂本くんは、

「はい、大丈夫です」

と、はつきり答えた。

「そうか」

教頭先生は、そういったものの、少し不満そうに続けた。

「授業中だけでも、うしろでしばってはどうかだろう」

教室が、坂本くんの答えをまっている。

「いえ、くせがついてしまうので、しばらく
せん」

教頭先生はそれ以上、なにもいわずに、歩き
だした。

くせがついたら、いけないのか。そこまで、
髪にこだわるのはなぜだろう。

夜、きょうのごはんは、大好きなオムハヤ
シだ。ママが考えた残り物メニューの一つで
残りごはんでオムライスを作り、やはり残っ
ていたハヤシライスのルーを横にかけるとい
うものだ。それがあわせるとすごくうまい。

「うちのオムハヤシは、サイコーだね」
ちよつと、ほめすぎかな。それでも、ママは
自分の分を作りながら、うしろをふりかえつ
た。

「ありがとー。そういつてくれるのは、ケン
トだけよ」

パパは食事のことに意見はいわない。

「ところで、ケントのクラスの転校生の子は
どう」

「どうって」

町で、ユウキのママと会い、坂本の話がでたらしい。

ユウキは、藤川と坂本のことを話したのかな。

「ヘアドネーションしているって聞いたわ」
そのことか。少し、ほっとする。

「ママ、ヘアドネーションを知っているの」
ママたちの関心ごとは、坂本の髪の長さのようだ。

「前に聞いたことがあるの。人を助けることは、いろいろあるけど、髪を伸ばし続けることは、思った以上にたいへんよ。よほど、強い意志がないと、なかなか難しいことだと思うわ」

「伸ばすだけなのに」

「寒い季節ならば、いいけれど、じめじめした季節や真夏があるのよ。ケントだったら、一年もできないわね。シャンプーするにも、ドライヤーするにも時間がかかるし」

「ママは髪の毛、のばしていたことあるの」
おれの知っているママは、いつもショートヘアで、ドライヤーを使わなくても自然に乾いてしまいそうな長さだ。

「昔ね。でも、一度ショートヘアにすると楽だから、もう無理」

坂本は、それを二年も続けているのか。

あの日以来、ひっかかっているもの。それは、坂本くんの髪に対するこだわりと、おれのなさけなさ。

しばらくすると女の子たちは、もう坂本くんに聞くことがなくなったのか、以前ほど、まわりに集まらなくなった。

あいかかわらず、坂本くんの髪は日光に照らされて輝いている。

「お弁当と水筒、タオルを忘れないように。ケント、ぼっーとして忘れないように」
バスケの声に、みんながおれをみて笑っている。ふりむくと、ユウキもおもいつきり笑っていた。

あしたは、少し先にある海岸公園と、海の生物館を見学に行くことになっている。

近所なので、ほとんどのこどもは、その場所に行ったことがあるはずだ。小学校にはいつてすぐの遠足は、今でも海の生物館だと思う。

「あしたのお弁当は、からあげと卵焼き。それにとり五目のおにぎりにして」
夕方、ママに念をおす。

「わかってるから」
前の遠足で、ウインナーとハンバーグ、梅干しのおにぎりだったことがある。

「なんで、いつもどおりじゃなかったのと怒ると、」

「同じメニューはあきると思って」という返事がかえってきた。

「かえって、遠足のメニューが決まっているほうが考えなくてすむわ」

ということになった。

翌日は、真っ青な空におひさまが輝いていた。

二列に並び、学校をでる。大通にでて、商店

街を歩く。しばらくして、左にまがると海に向かう道にでた。直線の道をひたすら歩く。大きな建物がみえてきた。海の生物館だ。海の生物館には、近くの海岸に住んでいる魚や貝が展示されている。魚もいいけれど、やっぱり、公園の中央にある大きなアスレチックの方がいい。釣りもの人もたくさんみえる。沖をゆつくりと大型タクシーがとおっていく。海の生物館を見学したあとは、自由時間になった。アスレチックは、大人気だから、なか前になかなかすすまない。やっと順番かせきたとおもったら、もう、お弁当の時間になってしまった。一組は、入口に近い場所で弁当を食べることになった。早く食べて、アスレチックに行くことにする。「ケント、ほんとうに、とり五目のおにぎり好きだよなあ」

ユウキは、おいなりさんをほおぼっている。

「これだったら、毎日でもいいな」

「早く食べて、遊びに行こう」

帰りの時間までには、まだ時間がある。

最後のからあげを食べようと口をあけると、芝生のすみにすわっている坂本くんがみえた。ひとりだった。

「坂本くん、誘おうか」

ユウキも

「そうだな」

と、たちあがった。

「いっしよに、アスレチックで遊ばないか。」

中が秘密基地みたいだよ」

ユウキのことばにびっくりしたようだった。

「ここに来たことある？」

髪が風にふかれて、右にいたり、左にいたり。まるで、わかめがはりついているみたいだ。

「きょうがはじめて」

「そうか、転校したばかりだからな」

「おもしろいよ」

坂本くんは、持っていたおにぎりのラップをあわてて、まるめ、白い袋にいれた。コンビニのラベルがみえた。

おかあさん、お弁当作れなかったのかな。

三人そろって、走りだす。

もう、みんなが集まりだしていた。

「だめだ。反対からいこう」

正面からではなく横から、中へすすもうとした時だ。

二組の藤川たちがいた。藤川たちも同じことを考えていたらしい。

「なんだ、また、おまえらか」

「じやまなんだよ」

藤川が、横からむりやりはいろうとする。

藤川の仲間も、手でうしろにいけと合図する。

「そっちがあとからきただろ」

ユウキは譲ろうとしなかった。

「たまたま、サッカーの試合に勝ったからつて、えらそうなこというな」

「この前のミニゲームのこと、気にしてるのか」

ちよつと、嫌みだったかな。

「きょうは、最悪だー。気持ちが悪い坂本もいるし」

藤川の声がかわる。

「まったく、一組は、気にいらねーな。へんなやつばかりだよ」

「ほんと。きょうこそ、はっきりさせようぜ。

なあ、藤川」

肩をおされて、外にでる。

近くにいた女子たちが、逃げていった。

藤川たちは五人。おれたちは三人。

まずい。ただ、おれもユウキもこの前のことを覚えている。自分の中でもややもやしていたもの。それをはっきりさせたかった。

「女みたいにいつまで、髪の毛ばしてんだ。目ざわりだよ。それって」

「いいだろ。個人の自由だ」

ユウキが言い返す。

「フン。前からきえろ」

「なんか、意味わかんない」

いいがかりとしか思えない。

「なにー」

藤川はことばより早く、ユウキにむかっている。それが、合図になった。おれは藤川の足をけとばした。

「やめたほうがいい」

坂本くんが止めようとする。この前あんなに、やられたはずなのに。藤川の仲間が坂本くんの髪をひっぱる。

「やめてくれ」

もちろん、そのことばを聞くような相手ではない。きょうは坂本くんを守りたい。特別、仲良くしているわけではない。どんな理由で髪を伸ばしているかも知らない。

でも・・・。今は、藤川たちに向かうしかない。なぐられて、首をしめられそうになる。ユウキも、倒れた上にのりかかれて、動きがとれない。

やられっぱなしではだめだ。それだけは、絶対だめだ。

「負けるかー」

自分自身に、いった。おもいきり手をはらいのけて、ユウキを、坂本くんを助けに行きたい。あきらめことはしたくない。

「やめろ。お願いだから、やめてくれー」

坂本くんが叫んだ。

もう、なにがなんだか、わからなくなってきた。

「おまえら、なにしてるー。ケント、ユウキ、やめー。坂本もだ」

バスケがびつくりした顔で飛んできた。

「こらー。藤川ー。いかげんにしろ」

二組の先生も走ってきた。

結局、むりやりはなされて、事情を聴かれた。

いいわけなど、したくなかった。

みんな、下をむいてしゃべらない。

「わるいのは、ぼくです。すみません」

坂本くんが頭をさげた。

「えっ」

なぜ、坂本くんがあやまるのか。

「ヘアドネーションのことをいわれたので、
つい……。それをケントくんとユウキくん
が助けに入ってくれて。すみません」

「ちがう。坂本くんは、わるくない」
ユウキも大きくうなづく。

藤川も返事をしない。いつものことらしく、
藤川は、二組の先生に連れていかれた。

「ケントとユウキが、けんかをするとは思わ
なかったよ」

バスケは、それだけしか言わなかった。
学校までの帰り道、坂本くんの横を歩く。

「ごめん。坂本くんは悪くないのに」

「ううん。ケントくんとユウキくんがさそっ
てくれたから、アスレチック、楽しかった
よ」

「遊ぶ前にじやまされたけど……」

うしろのユウキが、

「こんど、三人でこようよ」

と話かける。

「そ、そうだね。みんなの分のとり五目のおにぎりもってくる」

「ケントくん、とり五目のおにぎり好きなの」

「ケントでいいよ。大好きかな。だから、遠足のおにぎりは、とり五目だよ」

「ケントはいいね……。うちは無理。だからコンビニで買うことにしてる」

そうか。さっきのおにぎりは、やっぱりコンビニで買ったものなのか。

それから、少しずつ、坂本とも遊ぶようになった。放課後にサッカーもやる。

ユウキもうまいが、坂本はもつとうまい。

「すごいなあ」

とほめると、まだまだという。

坂本はつぶやいた。

「すごかったよ。ヒロヤは……。サッカーが大好きだった。死んだおにいちちゃん、ヒロ

ヤ・・・。絶対、プロにいきたいって、夢だった」

ユウキもびっくりしている。

「もう、死んで二年になる。それからずっとうちの家族の時計は止まったまま。たぶん、ヒロヤの病気がわかってから、かあさんはヒロヤだけしかみなくなった。今もヒロヤだけをみている。横に、とうさんやおれもいるのにみようとしない。だから・・」

「ヒロヤは、強い薬のせいで、髪の毛がぬけた。それでいつも帽子をかぶっていた。ヘアドネーションのことを知ったのは、その頃かな。きつと、髪をのばしたら、かあさんが喜んでくれるかもしれない。病気のこどもたちの役にたつかもしいない。いつか、横をむいてくれるかもしれない・・なんてね」

ママのお弁当を食べたり、放課後、サッカーをしたり、それが普通だと思っていた。それって当たり前のことだと思っていた。

坂本の目が、遠くを見ている。同じ四年生なのに、もっと別の世界をみている。

「ごめん。よけいな話だった」

「ううん、そんなことない」

「よかった。話ができで、今まで、なかなかともだちに話せなかった」

土曜日の午後、ユウキと遊んだ帰り道、公園の横を通った。

「ケント」

前からきた小学生が笑っている。となりにいるのは、おかあさんかな。

「坂・・・本」

短く髪を切った坂本だ。ぜんぜん、わからない。

「今、美容院にいった、切ってもらった」
頭をなでている。

「自分じゃないみたい」

「月曜日、みんながびっくりするよ」

横のお母さんが笑っている。

「ケントくん……。いつもカズヤと遊んでくれて、ありがとう。今度、遊びにきてね」
「えっ、はい」

坂本は、うれしそうにおかあさんを見上げていた。こんな顔するのか。

西の空がオレンジ色にそまっていくな。まわりの雲もうつすらと同じ色になっていく。まわ少しずつでも、変わるといいな。

きょうより、あした、あしたよりあさってと
きつと、変わるはずだ。